

## タイ高等教育機関におけるタイ人日本語教師の良き日本語教師観 ——PAC 分析と半構造化面接より——

The Image of a Good Japanese Teacher as Viewed by Thai University Teachers  
Using PAC (Personal Attitude Construct) Analysis and Semi-Structured Interviews

古別府ひづる FURUBEPPU, Hizuru

山口県立大学 Yamaguchi Prefectural University

【キーワード】 タイの日本語教育、タイ人日本語教師、日本語教師観、質的分析、PAC 分析

### 1. はじめに

国際交流基金（2011）の調査によると、タイの日本語学習者数は、78,802 人で、前調査の国際交流基金（2008）に引き続き世界第 7 位、東南アジア第 2 位を維持すると同時に、10.9%増加している。これは、1998 年のほぼ 2 倍の学習者数に達し、タイにおける日本語教育は着実に浸透しつつある。学習者数の内訳は、中等教育機関が 49.1%、高等教育機関が 26.9%で、国際交流基金（2006）の時点で、中等教育機関が高等教育機関の学習者数を超え、割合が逆転したものの、この二つの機関が中核を成していることに変わりない。それは、中等教育機関の学習者数が圧倒的多数を占めているインドネシア（学習者数世界第 3 位、東南アジア第 1 位）や学校教育以外が最多のベトナム（学習者数世界第 8 位、東南アジア第 3 位）とは異なる特徴を見せている。古別府（2008）では、タイ中等教育機関のタイ人日本語教師の良き日本語教師観について PAC 分析を行った。本研究では、もう一つの主要機関である高等教育機関の、タイ人日本語教師の良き日本語教師観について PAC 分析を行う。教師の持つ教師像は、教師の授業における学習者に対する態度と結びつく。何を重要視しているかが、授業の内容と方法に反映され、結果的に学習者の動機付けに影響を及ぼす。さらに、タイ人教師だからこそタイの教育姿勢が窺える共にタイ人から見た日本・日本語の魅力に気づかせてくれると考える。教師像は

機関の異なる教師によって相違があるのだろうか。それはどのように異なるのだろうか。これらを質的に探ることを目的とする。

### 2. 先行研究

古別府（2008）では、タイの中等教育機関の二人のタイ人日本語教師に対し、良き日本語教師観について PAC 分析を行った。結果、二人の共通点に、学習者への思いやりと専門知識と授業の工夫の重要性が挙げられ、相異点に、非進学校の日本語教師歴 5 年未満の教師は、日本が好きで、楽しい授業の方法や生徒への機会提供の為に何でもやると述べているのに対し、進学校の日本語教師歴 10 年以上の教師は、心理面も考慮した生徒に対する緊張感のある道徳的態度を重視していた。両者とも日本語教師としての喜びと自身の日本語学習への強い意欲が根底にあり、日本語教育環境としては、経済状況の悪化が生徒や教師の意欲に影響を及ぼしていることや日本語教材と日本語教師の不足について言及している。この古別府（2008）の質的分析に対し、古別府（2009）では量的分析を行っている。タイの中等教育機関における日本語教師 121 名（うち、タイ語母語話者 106 名）に対し、質問紙による調査を行った結果、学習者を思いやり、教師としての強い自覚を持ち、学習者の理解のための専門知識の活用力と授業の実践力のある教師が求められていることがわかった。両調査より、中等教育機関におけるタ

タイ人日本語教師の良き日本語教師の特性は、「学習者への思いやりと専門知識と授業の実践能力」と言える。これらの先行研究を踏まえ、本稿では、タイの高等教育機関の二人のタイ人日本語教師の良き日本語教師観についての事例を示す。それより、1) 高等教育機関におけるタイ人日本語教師の日本語教師観、そして、2) 日本語教育経験差による日本語教師観の違いを明らかにし、タイの日本語教育事情理解の一助とすると共に、タイ高等教育機関の優れた日本語教師の行動特性の変数抽出を試みる。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 PAC分析とその妥当性

本研究では、古別府 (2008) 同様、PAC (Personal Attitude Construct) 分析を用いた。これは、個人の態度構造を測定する為の、被調査者が1人でも可能な質的分析で、内藤(1997)により開発された。この手法は、被調査者のスキーマを通し抽出された変数(連想項目)を採用し、被調査者は、イメージや理解しやすいデンドログラムのデータ結果を見ながら、クラスター構造の解釈やイメージの報告を行う為、調査者の志向に極大影響されない手続きになっている。

#### 3.2 被調査者

調査は、2011年8月、バンコクで、大学に勤務する以下の日本語教師2名に対し実施した。

タイ人日本語教師X：女性、年齢は50代前半、母語はタイ語、日本語教師歴25年、日本留学経験4年(大学院3年を含む)、修士の学位を持つ。

タイ人日本語教師Y：女性、年齢は20代半ば、母語はタイ語、日本語教師歴3ヶ月、日本留学経験3年(大学院)、修士の学位を持つ。

#### 3.3 調査手順

PAC分析の手順は、古別府(2008)と同様、調査協力者に、刺激語として「あなたにとって良い日本語教師とはどんな日本語教師ですか」という質問

を与えた。想起順に、カードに1枚ごとに1項目ずつ書かせ、思い浮かばなくなるまで、何枚でも書いて良いと指示を与えた。次に、想起順に並べたカードを重要順に並べ替えさせた。その後、各連想項目間の類似度を直感的イメージで7段階評価(非常に近い1、かなり近い2、幾分近い3、どちらとも言えない4、幾分遠い5、かなり遠い6、非常に遠い7)で評定させた。それによって作成された類似度距離行列をSPSS15.0Jfor Windowsにそのまま投入し、ウォード法でクラスター分析を行った。クラスター分析により析出されたデンドログラムの出力画面には、重要順位の番号が打たれている(図1、図2参照)。調査者は連想項目を読み上げ、調査協力者は対応する連想項目を書き入れることにより、調査協力者の記憶をよみがえらせると共に意識化する段階を設けた。その後、クラスターとして解釈できそうなグループを調査者が伝え、それについて調査協力者が確認または訂正し、その後、調査者は調査協力者と共にクラスター名をつけるという作業を行った。また、調査者は調査協力者に同じグループと思われる理由について質問した。最後に、調査者が総合解釈を行い、調査協力者と確認した。

さらに、全体像を見えやすくする為、質問をある程度決め、比較的自由に答えてもらう半構造化面接を行った。半構造化面接の質問内容は、①日本語教師になったきっかけと現在に至るまでの経緯、②勤務先の日本語教育環境、③日本語教師をやって良かったこと、④日本語教師をやって大変なこと⑤自分の性格、についてであった。双方の手続きは、被調査者が日本の大学院での修士号を取得しただけの日本語力を有していることと、調査者が日本語母語話者であることより、全て日本語によって行われた。

### 4. 結果

PAC分析の結果は、図1、図2参照。半構造化面接の結果は、表1参照。

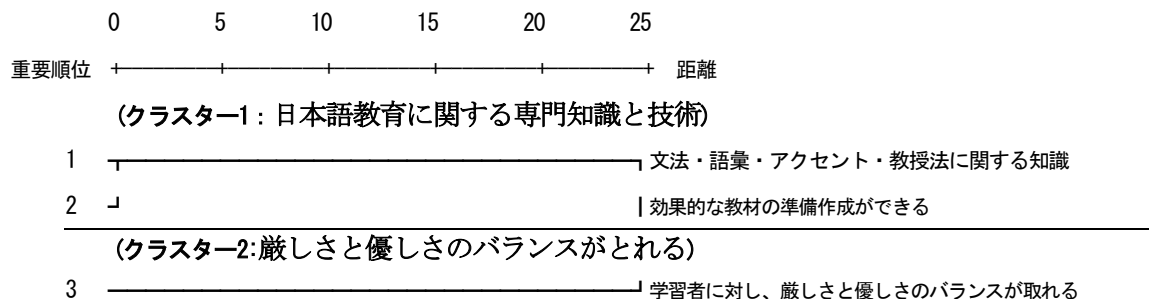


図1. タイ人日本語教師Xのデンドログラム

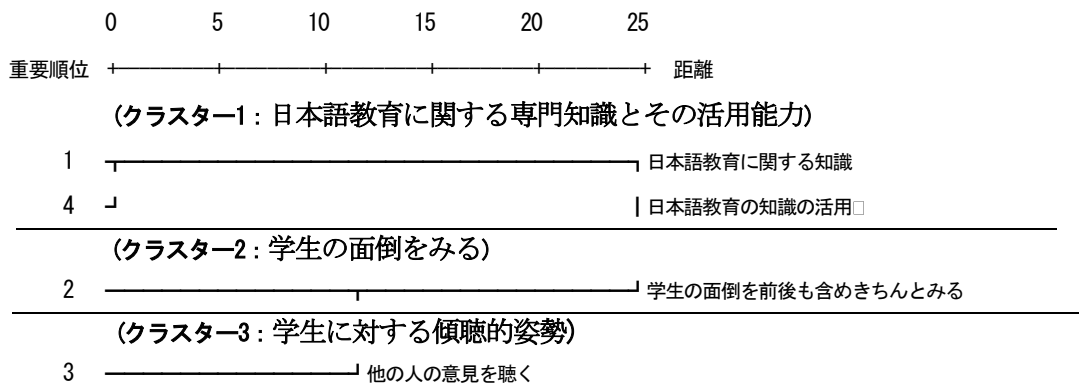


図2. タイ人日本語教師Yのデンドログラム

表1 半構造化面接結果

タイ人日本語教師X	タイ人日本語教師Y
<p><b>①日本語教師になったきっかけと現在に至るまでの経緯</b></p> <p>Xが高校生頃の頃、英語と比べて日本語ができる人が少なかった。政府の高官だった伯父の意見に啓発され、大学では日本語を専攻。大学を卒業し短大で日本語を教えながら、在職中に1年間県費留学生として沖縄の大学に留学。帰国後、文部省の奨学金をもらい、大阪の大学院に留学し、修士号取得。帰国後、企業の通訳を経て日本の某航空会社のタイ人客室乗務員への日本語教育に15年間携わる。日本を代表する航空会社でサービスの為の日本語表現や非言語表現の指導を行う。特にクレーム処理の指導は、タイ語には、日本語ほどの細やかな待遇表現はなかったので苦労する。また、タイ人は長音が使えないため、誤解を与えないよう発音訓練も行った。その後、現在の大学に移り、2年経つ。</p>	<p><b>①日本語教師になったきっかけと現在に至るまでの経緯</b></p> <p>高校時代に日本人に興味を持った。婉曲的な表現を持った、タイ人とは異なる別の価値観を持つ日本人を知りたい、コミュニケーションしたいと思った。大学で日本語を専攻し、卒論は、日本人の指導教官の下、授受表現について書いた。日本語がおもしろい、日本語の研究が好きで自分に気づく。その後、日本の大阪の大学院に進学し、修士論文は、Eメールに見られるやわらげ表現についてであった。留学中は、大阪の語学学校で3年間タイ語を教え、タイ語にも興味を持つようになった。3年間の日本留学を経て帰国し、理系の大学の英語と日本語を教える語学センターで日本語を3ヶ月教えた。</p>
<p><b>②勤務先の日本語教育環境</b></p> <p>私立大学のビジネス日本語学科（入学試験がない、オープンユニバーシティ）でホテル日本語（選択科目）を担当。大学とは別に一般成人向けの中級コースで授業を持っている。</p>	<p><b>②勤務先の日本語教育環境</b></p> <p>一週間前に、現在の大学に移りまだ教えていない。大学とは別に一般成人向けの中級コースで待遇表現に関わるEメールライティング（問い合わせ、誘いお礼のメール等）を教えている。</p>
<p><b>③日本語教師をやった良かったこと</b></p> <p>知識を増やすことができる。苦労して頑張ってきたことを人が認めてくれ、自信が持てる。他機関のセミナーへの参加や教材作成に声をかけてもらえる等貴重な体験ができる。</p>	<p><b>③日本語教師をやった良かったこと</b></p> <p>頑張ってきたことが人の役に立てる。教えながら学ぶことができる。</p>
<p><b>④日本語教師をやった大変なこと</b></p> <p>non-native 教師なので文法・語彙・アクセント指導に限界がある。例えば、タイ語にない日本語の助詞の使い方、語彙の多さと場面による表現の違い、独特の言い回しがある。上級を担当できない。適切な教授法が見つけれられない。現在の勤務先では、中国人、インドネシア人、韓国人等の留学生もおり、英語で授業をしなくてはならない。敬語を教えることや、学生を励まし厳しく教えることのバランスが難しい。</p>	<p><b>④日本語教師をやった大変なこと</b></p> <p>大変なことは、スケジュールのコントロールができない。レベル差がある学習者に対して教えることの難しさを感じる。</p>
<p><b>⑤自分の性格</b></p> <p>心配性。完璧主義。こだわる(特に日本語に対し)。日本フリーク。理想が高い。素直。</p>	<p><b>⑤自分の性格</b></p> <p>おしゃべりが好き。明るい。せっかち。楽観的。</p>

#### 4.1 タイ人日本語教師Xのクラスター分析

全部で3項目、二つのクラスターに分けられた。

##### (1) クラスター1：名付け：「日本語教育に関する専門知識と技術」

Xは、non-native 教師だからこそ、言語能力と教授法に関する基本的な専門知識が重要で、特に初級におけるアクセントは大事である、上級クラスも担当できるようにしたい、ネイティブに近づきたい、また、「効果的な教材や教具の準備・作成ができる」は、「文法・語彙・アクセント・教授法に関する知識」を支えその上で学習者を惹きつける多様な活動を取り入れた魅力的な授業をしたい、学生の理解と定着を考えた流れの良い授業を得意とすると述べていた。

##### (2) クラスター2：名付け：「厳しさと優しさのバランスがとれる」

Xは、最近の学生はやる気が感じられないこと、自分は学生に対して厳しいと述べていた。

#### 4.2 タイ人日本語教師Yのクラスター分析

全部で4項目、三つのクラスターに分けられた。

##### (1) クラスター1：名付け：「日本語教育に関する専門知識とその活用能力」

Yは、「日本語教育に関する専門知識」とは、日本語、異文化心理、第二言語習得論等の理論的知識のことで、日本留学前は、日本語教師とは「日本語ができる」ことしか念頭になかったが、日本の大学院へ進学後、さらに、「研究のできる」教師があることがわかった、また「活用能力」とは、授業の進め方、教案の作り方、学生の理解の為の教授活動に限らず、例えばスピーチコンテストや留学に関するイベント参加等も日本語・日本事情の活用という意味で含まれると述べていた。

##### (2) クラスター2：名付け：「学生の面倒をみる」

例えば、宿題や作文のチェック。準備と授業、フォローアップも含むと述べていた。

##### (3) クラスター3：名付け：「学生に対する傾聴的姿勢」

Yは、教師は自信を持っている人、自分に間違いないと思っている人が多い。それは、留学していた日本でもタイでも見られた。そういう態度は学習者から尊敬が得られないし、学習者の意欲をむしろ削ぐ。例えば、学習者のテ形に関する質問を無視したり、流してしまう教師がいた。それでは、学習者の十分な理解に結びつかないと述べていた。

## 5. 考察

### 5.1 日本語の専門知識と活用能力

XとYの結果では、専門知識、中でも、日本語だけでなく日本語教育学的視点という共通性を持っているが、その焦点は異なる。Xは、タイ語との違いから見た日本語のそのものに関する基礎的知識である言語能力と教授法のことを指し(4.1(1)参照)、Yは、日本語の知識や言語能力だけではない異文化心理や第二言語習得論も含めた理論的知識(4.2(1)参照)を指すと述べている。つまり、Xは、レベルにより、また、授業を組み立てる際に何が重要かをタイ人教師であるが故の困難さを感じてきた上での言及だと考えられる(表1. ④左欄参照)。一方、Yは、レベル差のあるクラスへの対処に言及している(表1. ④右欄参照)が、具体性には至っていない。

また、専門知識の活用として、Xは、授業活動や授業の流れを指している(4.1(1)参照)のに対し、Yは、広く日本語のスピーチコンテストや留学の機会提供までをその活用として含めていた(4.2(1)参照)。Xは、授業活動そのものを語っていたのに対し、Yにおいては具体的な指摘は見られなかった。また、Xは、教材作成の技術を、専門知識そのものを支えるものとして重要順位2位(図1参照)で重視しているが、Yは、重要順位4位(図2参照)で、Xほどではない。

これらの二人の教師の具体性と漠然性という対照的結果には、25年と3ヶ月という教歴の差が反映

していると考えられる。

## 5.2 学習者に対する態度

XとY双方とも学習者への教師の態度について言及している。Xは、学習者を励ましたり、厳しくすることのバランスの取り方の難しさを述べている

(4.1(2)参照)が、これは、古別府(2008)の中等教育機関の経験の長い50代の日本語教師においても同様のことが挙げられており、両者共、優しさと厳しさのメリハリのある態度の重要性について言及している。一方、Yは、教師の傾聴的姿勢の必要性を挙げており(4.2(3)参照)、Xが教師側の視点で述べているのに対し、Yは、どちらかと言えば学習者側の視点で述べている。それは、Yが授業の前後も含めたケアや、対外的な機会の提供を求めているところからも言える。古別府(2008)の中等教育機関の経験5年未満の30代の日本語教師が生徒のためには何でもやると言及していた点からも、比較的若い世代において学習者の視点に立った姿勢が窺える。

## 5.3 日本語そのもの、特に待遇表現への強い関心

本調査より、XとYは共に、タイ語と異なる日本語、特に待遇表現への関心が強いことがわかる。Xは、日本の某航空会社のタイ人客室乗務員への日本語教育に15年間携わってきており(表1. ①左欄参照)、実践の最前線の待遇表現がたたき込まれている。現在の勤務先でも、ホテルの日本語を教えており(表1. ②左欄参照)、サービスのための日本語、即ち、待遇表現を実際に置き換えて提示できるベテランである。Yは、高校生の時、日本語に関心を持ったきっかけや大学院の修士論文も日本語の婉曲表現についてであり(表1. ①右欄参照)、現在も、大学とは別に一般成人向けのコースで待遇表現に関わるEメールの書き方を教えている(表1. ②右欄参照)。これより、外から見た日本語の特徴の一つが待遇表現であるということに改めて気づかされる。この待遇表現への強い関心は、二人が、日本の大学院にまで進学し、日本語について研究するという段階を経て、日本語教授に携わっているという経歴と

結びついていると考えられる。そこには、タイ人から見た日本語とタイ語との対照的視点と探求心がある。この日本語のあり方に特化した言及は、古別府(2008)の中等教育機関におけるタイ人日本語教師には見られなかった。

## 6. まとめ

以上、高等教育機関におけるタイ人日本語教師の日本語教師観において、PAC分析と半構造化面接という質的分析を用いて比較分析した結果、以下のようにまとめられる。

1) 良き日本語教師観には個人差がある。

2) 高等教育機関のタイ人日本語教師の良き日本語教師観は、古別府(2008)、古別府(2009)の中等教育機関のタイ人日本語教師の日本語教師観と共通して、専門知識とその活用と学習者への配慮が挙げられる。相異点として、高等教育機関の日本語教師に日本語教育学的言及が見られた。

3) 日本語教師の経験差は、専門知識の捉え方と学習者に対する態度に見られた。経験の長い教師は授業に直結する基礎的知識と言語能力と教授法についての具体的な提示があったが、経験の短い教師は広く理論名に言及するのみに留まっていた。学習者に対する態度では、経験の長い教師は厳格さも必要と見なす教師側の視点、短い教師は学習者側の視点に立っており、両者の態度は、古別府(2008)の中等教育機関のタイ人日本語教師においても同様な結果が見られている。

4) 高等教育機関におけるタイ人日本語教師の日本語教師観には、タイ語との比較的視点より、日本語そのもの、特に待遇表現においての強い関心が共通項として挙げられる。

## 7. 課題

高等教育機関における量的調査に向け、本結果を質問項目に反映させたい。また、本結果と古別府(2008)双方に、経験差により異なる変数の存在が考えられた。古別府(2009)の中等教育機関の

量的調査で経験差の分析を進めていない点も併せ、双方の機関の経験差による教師観の違いも明らかにしたいと考える。さらに日本語独自の待遇表現の価値についても考察を深めたい。

#### 参考文献

- 国際交流基金（2008）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2006年』凡人社
- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』国際交流基金
- 内藤哲雄（1997）『PAC分析実施法入門』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄（2004）『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版
- 古別府ひづる（2008）「タイ中等教育機関におけるタイ人日本語教師の良い日本語教師観—PAC分析と半構造化面接より—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第5号、pp.37-46
- 古別府ひづる（2009）「タイ中等教育機関の日本語教師が求める日本語教師の行動特性—探索的因子分析より—」『日本教科教育学会誌』第32巻1号、pp.59-70